

マフラー

冬の朝は結構好きだ。

まあ、宮崎みやざきの冬は寒いといっても知れたもので、今朝もTVの天気予報を見ながら、東京はこっちよりずいぶん寒いんだな、大丈夫かな、なんて思ったりもしたけど、でもそんな温暖な私の町でもこの季節の朝の空気は凜としていて、受験生としてもちよっぴり身が引き締まる。

玄関先で靴を履きながら、制服の上にマフラーをぐるぐるっと巻いて、首の後ろできゅっと結ぶ。

高二の頃とか、絢あやたちといろんな巻き方を試してみたりもしたんだけど、結局はこの巻き方に戻ってきちゃうんだよね。

* * *

——すずめ、ほうら。おいで。

かすかに思い出す、遠い遠い昔の声。

——今日はしぼれるから、ちゃんとはマフラーするべ。ね。

そう言いながらお母さんはいつもちよつとしゃがみ込んで、私にマフラーをぐるぐるっと巻いて、首の後ろできゅつと結んでくれた。私の大好きな黄色。これを巻くともこもこになって、どんなに寒い日でも無敵になった気がした。

* * *

あの日のことはよく覚えていない。ただ、すごくゆきがふってきて、はやくお

かあさんをさがしにいかなきゃって思っ、いつもみたいにマフラーをくびのうしろでむすぼうとしたけど、どうしてもおかあさんみたいにうまくむすべなくて、へんなむすびかたになっちゃったのは覚えてる。いつもはどんなすごいゆきのひでもへっちゃらだったのに、なんかきようはそとにでるのがこわい。むすびかたがいつもとちがうからなのかな。

* * *

ずっと忘れてたけど、今ならば、わかる。あの日、お母さんみたいにマフラーをぐるぐるっと巻いて、首の後ろできゅっと結んでくれた人がいた。そしたらなんだか、ちよっとだけ、こわくなくなっただ。

* * *

だから私は今日もこうやって、ちゃあんとマフラーを巻く。今の私は、後ろ結

びなんて秒でできる。何しろもう、包帯法だって完璧なんだよ。ピンクのマフラーをぐるぐるつと巻いて、首の後ろできゅつと結ぶと、やっぱり無敵になった気がする。将来が不安になる夜もあるけど、毎朝この儀式をすると、なんだか未来なんて怖くないって思えてくる。この瞬間が好きだから、冬の朝が好きなんだ。

「行ってきます！」

玄関のドアを開ける。冷たい空気が頬を刺すけど、きゅつと結んだマフラーがあればへっちゃらだ。裏庭のスズメのさえずりに交じって遠くの漁港の喧噪がこの高台にもかすかに届いて、なんていうか、今日も世界が動き出してるって感じがする。リュックに詰めた環さんのお弁当も、あと何回食べれるかなって思うと、最近ちよつとね、いとおしいんだ。

サドルにまたがって、ぐいつとペダルを漕ぎ出す。そのまま加速する。カーブを曲がると視界が一気に開けて、キラキラした海の青が一面に広がる。首の後ろでマフラーが潮風にはためいてるのがわかる。自転車は無敵の私を乗せて、見事な冬晴れの坂道を走り続けてゆく。光の中をずっとずっと、もっと先まで。私、

きつと行けるよね？

(了)